

団を防衛するとチンパンジー型の社会となる。

オスには雌をめぐって激しく争う性質があり、雄集団の形成には雄間の平和維持は重要な問題である。チンパンジーやボノボは父兄の雄集団を作っており、互いに誕生以来の知り合い関係にあることもそこに貢献していることだろう。さらに雄たちは順位制によって争いを回避している。しかし常に劣位者に譲歩をせまる順位制は、劣位者の不満を蓄積させ、時には優位者への反抗が表面化して無秩序と暴力が発生する。順位制は暴力を内包した平和のシステムである。だが素手で戦う彼らは、順位の闘争で死亡することはほとんどなく、その限りで順位制は有効に機能していると言える。

二足で歩く人類がサバンナで誕生したことは間違いない。樹上に逃げることもできないサバンナで、肉食獣や競合するヒト類に対抗するために、二足で歩き武器を持つしかなかったのではないか。武器の携帯は環境適応には有効である。

だがその武器を持って種内で戦えば争いは常に死を招くことになる。そうなれば順位制では、武器を持つ人類社会の平和は維持できない。さらに効果的な平和力を持たない限り、武器をもつ社会は存続できないのである。

分配によって不平等な状態が解消すれば、争いの原因は消滅する。これこそ人類が発見した、さらなる平和力の原理である。この原理を基礎に人類は、新たな社会を形成した。人類の家族社会は、親族集団間で配偶者を分配しあい、親族集団の成員のそれぞれに配偶者を分配し、夫婦間においても日々、物やサービスを分配しあう。家族社会は、分配する関係を基礎に作られた社会である。そのことで家族社会は、武器を持つ人類社会に強力な平和力をもたらした。家族社会を形成することで人類は、武器を持つ社会を維持することができたのである。

(西田正規)

#### ◆共同研究プロジェクト◆

### 表象に関する総合的研究

#### 平成18年度第1回研究会

#### 研究テーマ：『表象のエチオピア』(高知尾仁著) 合評会

【日時】2006年10月14日(土曜日)午後1時半より5時

【場所】AA 研小会議室(302)

【参加者】司会：浅井雅志(京都橘大学)

評者：彌永信美(AA 研共同研究員)、田中純男(大正大学)、荒木正純(筑波大学)、真島一郎(AA 研)

#### 【内容】

「表象に関する総合的研究」を始めるにあたって、出発点を明らかにするため、合評会を行った。予め評者を決めておき、会の進行で出席者全員にご発言をお願いした。

全員が指摘したことは、著者の文体(です、ます調)で、論点が曖昧になるという欠点にも

かわらず、その意図(結論を急がず、対話しつつ登場人物の考えを再構築する)は伝わる利点が指摘された。それぞれの研究でも、こうした文体の試みを採用する可能性が語られた。

表象に関しての指摘は、先行研究に言及しなかった点に不満も多かったけれど、おおむね論点(代理性、代表性、離隔性、不在性という表象の特性)は理解された。荒木氏は、新世界表象の研究(新歴史主義第三世代)に言及し、表象媒体と表象実体(「実物による表象」)の代表性・代替性(「らしさ」)について言及した。図像における「らしさ」というものは、図像上変形・追加・アレゴリー化された形象(図像学的には attribute と呼ばれるものである)に関しては、ミーメシスの問題として、今後研究会で、展開されるべき問題である。田中氏は、個々の表象に関しては、今後インド表象や仏教・宗教表象として研究されることにな

ると指摘された。

真島氏は、著者の言う表象の「戯れ」に注目し、共同体の結合原理、あるいは、共和主義の原理と旅行者＝遊戯者との間に生まれる軋みについて言及した。生の欲求による隔離と情念による結合の矛盾、わけ隔てられるべき存在と紐帯の衝突を意識する啓蒙期という時代における、遊戯者の存在、つまり、旅において風景という

戯れや共認不可能性という賭けと与る者、を際立たせて論評した。

共同研究の研究会でおこなわれるものとしては異例の合評会であったが、前回の「旅と表象の比較研究」プロジェクトと今回の共同研究プロジェクトを連結させ、論点を整理するという目的は一応果たせたと考える。(高知尾 仁)

### ◆共同研究プロジェクト◆

## マルセル・モース研究—社会・交換・組合

### 平成 18 年度第 2 回研究会

【日時】平成 18 年 11 月 6 日(月曜日)午後 1 時半より午後 6 時

【場所】東京外国語大学本郷サテライト 5 階セミナールーム

#### 【報告】

#### 1. 渡辺公三(立命館大学)

「第三期以降(1925 年～)の業績、および書評文約 400 点の読解をめぐる研究の展望」

#### 2. 関一敏

「第一期(1899～1914 年)の業績をめぐる研究の展望」

#### 【報告の要旨】

本第二回研究会では、渡辺による第一報告の冒頭で、モースの書評文約 400 点が彼独自の民族学的思考の発展プロセスにとり、第一期～第五期の時期区分をこえたきわめて重要な意味をもつとの指摘が示された。そこで研究会報告の形式をその場で変更し、渡辺は 1925 年以降のモース研究をめぐる展望についてひとまず概観するにとどめ、1899～1914 年の業績をめぐる第二報告については、渡辺が用意した書評文編年リストにもとづき、この時期の書評文の具体的な内容と顕著な特質について関氏が主たる専門的解説を提示しつつ一同でリストを精査する作業内容を採用した。

### 1. 第三期以降(1925 年～)の業績、および書評文約 400 点の読解をめぐる研究の展望

1925 年以降のモースの業績のうち、第五期(1947～1950 年)の主たるテキストは事実上『民族誌学の手引き』に限られるため、選択上の問題はとりたてて発生しない。『民族誌学の手引き』の日本語下訳作業をほぼ終えている渡辺は、同書中とくに第九章「宗教現象」を事例にとりあげ、第九章の節構成と自らの訳文とを出席者に示しながら、その思考の特質を概説した。

この第三期(1925～1929 年)および第四期(1930～1947 年)に関し、渡辺はモースの主たる業績リストを示しながら、自らによる基幹テキストの選択根拠を説明した。このうち第四期については、容易に予想されうる「社会的凝集性」「個体」「身体技法」「人格」等の問題系をめぐる有名な論考群にくわえ、渡辺が基幹テキストと見定めたのは、モロッコ旅行記(1930)、ピカソ論(1930)、土着芸術論(1931 年)、第一次大戦期以降のフランス社会学史論(1933 年)、シルヴァン・レヴィ論(1935 年)、E・アレヴィ宛の書簡(1936 年)、アントワヌ・メイエ追悼文(1937 年)、技術・テクノロジー論(1941 年)などである。また「贈与論」後に相当する第三期については、贈与論、文明論、冗談関係論のほか、デュルケム論(1925 年)、社会学論(1927 年)、フレイザー論(1928 年)、デュルケム『社会主義論』への序文